

愛知県立大学 文字文化財研究所

年報

「古筆切平家物語考証」序説

國學院大學文学部教授

松尾葦江

一 古筆切と軍記物語研究

古筆研究は奥のふかい分野である。私は古筆の判定などに関しては、眼に二丁字もないと言ってもいいくらい無学であるが、校務の関係や自分が専門とする軍記物語の伝本調査の機会に古筆切及びその画像に触れる機会が多くなり、本文流動のはげしい軍記物語の研究に、古筆切から得られる情報が重要な意味を持つことに気づくように

なった。長門切と呼ばれる読み本系の断簡についてはかつて拙著『軍記物語論究』に資料を提示したが、その後に管見に入った資料については別稿を用意中である。また、八坂系やその周辺に属する語り本系諸本の断簡に関して簡単に述べたこともある。しかしそれ以外については、眼に触れた資料は収集しているものの、そのまま放置していた。

名古屋で行われた中世文学会の平成二〇年度秋季大会で、藤井隆先生の御講演があり、先生は講演資料に左の五種の平家物語断簡を示された。

- ①世尊寺行俊平家切
- ②宝密大四半切
- ③一条冬良四半切
- ④貞敦親王巻物切
- ⑤道増巻物切

御講演を聴きながら改めて古筆切平家物語の調査・考証の必要性を感じた。まずは右の①②③について多少の説明を付加し、後日の考察の序としたい。

①はいわゆる長門切のことである。「長門切」の名称の由来ははっきりしない。もとは大型の巻本だったと思われる。その本文の大半は源平盛衰記に近いが、とき

に延慶本平家物語や長門本に近いこともある、現存諸本のどれにも一致しない場合もある。中には語り本系本文に近い切もある。現存平家物語には見いだせない記事もあるのだが、概ね読み本系本文の傾向を示している、書写年代を鎌倉末期とする説によれば、いわゆる延慶本が応永年間に転写される以前、読み本系諸本の流動期を想定する重要な資料である。長門切については別稿に譲ることとする。

二 語り本系平家物語の断簡

②③④の三種について述べた拙稿は、すでに入手しにくくなってしまったので、説明を付け加えながら略述する。

②宝密大四半切 藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』（和泉書院 S60）に写真と解題が掲載されており、それによれば室町初期（寛正頃）写となっている。本文は巻十「内裏女房」の一部である。現存諸本では南都本が最も近く、次いで屋代本・片仮名百二十句本に近い。すなわち、現在の平家物語諸本研究では年代が定まっていない、いわゆる「寛一系周辺本文」の一種が、一五世紀後半に存したこの手がかり

となる。

③ 一条冬良四半切 小島孝之氏の御教示によれば、藤井隆氏御所蔵の巻四「大衆揃」の一部のほかに、「鶴」(手鑑「玉海」)の一部の計二葉がある。藤井氏の解題では一条冬良の筆ではないが、書写は室町中期の初めの方かとされる。わずかだが誤写、誤訓がある。二葉とも現存諸本では享禄本、次いで片仮名百二十句本に近い。これもまた、いわゆる「寛一系周辺本文」の一種が一五世紀後半に存したことを想定する手ばかりとなる。未見だが高城弘一氏も二葉巻四「橋合戦」、同「三井寺炎上」御所蔵とのことである。

④ 貞敦親王巻物切 知る限りでは巻十の六葉が存する。「首渡」(宝島寺蔵、小島孝之氏提供のメモによる)、「内裏女房」(藤井氏蔵)、「海道下・千手前」(手鑑「翰墨場」)、「維盛入水」の前半(手鑑「集古帖」、同後半(落合博志氏蔵)、「宗論」(手鑑「古今墨林」)のそれぞれ一部に当たる。貞敦親王の筆か否かは不明だが室町中期後半の写という。本文は八坂系一類本B種に属すると思われる。

貞敦親王巻物切を、八坂系一類と比定したことにについて補足しておく。八坂系

平家物語諸本を早くから精査された山下宏明氏は、その伝本を一類から五類に分類された。大ざっぱに言えば、八坂系諸本の原型といえるのは一類・二類の諸本で、三類以下の本文は一方系の本文を撰りこんでおり、就中三類本は混合本、取り合わせ本が多く、一貫した性格を目安にグループ化しにくい。一類本では、中院本が古活字版として流布したのでよく知られているが、じつは中院本は、ところどころに、一方系下村本と認定される本文をつぎはぎしているのである。従って純粹に八坂系一類と見なしうる完全な現存本文は、中院本から下村本系統の補入を除いたものとはほぼ一致する三条西家本(尊経閣文庫蔵)である、ということになる(一類本にはほかにA種とされる文禄本・東寺執行本があるが、いずれも完本ではない)。中院本が、一方系下村本と認定される本文を撰りこんだのはいつか、はっきりしない。中院本も下村本も古活字で版行されているから、およそ慶長以前ではないかと想像するが確定はできない。三条西家本と中院本との間には微細な本文異同があり、それを手がかりに貞敦親王巻物切の位置づけを試みたが、あいにく指標となるべき両本の相違箇所が含まれて

いなかったり、あっても判断のつげがたい様相を示す。例えば、「海道下」の部分に「松吹風も素々たり」とあるが、「素々」は三条西家本で「さくく」、中院本では「さつく」となっており、これを見ると切↓三条西家本↓中院本という流動を想定できそうだが、「維盛入水」前半部では、「門司」(三条西家本「もんし」・中院本「もし」)、「むかひ」(三条西家本・中院本とも「むき」)、「給ふか」(三条西家本「給か」・中院本「給へる」といった異同がある。「維盛入水」後半部では「給ひぬる」(三条西家本・中院本とも「給候ぬる」)などの異同があり、それぞれが漢字・仮名を書き換えていて、結局、この断簡が中院本と三条西家本のどちらに近いかは断定しがたい。それゆえ、八坂系一類の本文であるとの比定にとどめた。八坂系諸本の成立・流動には解明されていない問題が多い。古筆切は年代判定の幅の限定が困難なので、直ちに中院本以前の状況が明らかになるとは言えないが、一六世紀後半の一類本のゆれを想定できるとは言えるだろう。

⑤ の道増巻物切は、流布本巻六「飛脚到来」の一部を金地下絵、金散らしの用紙に大字で書いた、大型絵巻の詞書とされている。

る。道増の筆ではないとされているが、書写年代は室町後期とされる。平家物語の卷子本は、近世の写本があるにはあるが、あまり多くない。どのような場で制作されたものか、注目される。

三 そのほかの断簡

以上、中世文学会での藤井先生の御講演の、平家物語に関する部分に注釈をつけさせて頂いたような形になったが、これ以外にも平家物語、またはその周辺の作品の断簡と思われるものは決して少なくない。

例えば川崎市市民ミュージアム蔵『古筆手鑑披香殿』（淡香社 H11）には「伝楠長諸筆平家物語断簡」というものが収載されている。解説には「一六世紀（室町末期）写とあり、巻六「小督」の抜粋となっている。翻字してみる。

人の琴の音か楽ハ何そと聞たれハ／おつとおもひてこふるなのさふふれん／なるそうれしき たそや門に人を／とのするハ心得てき候へ中／／に／菟角忍びてあしかりなむとまつ此／戸ほそをしひらく かとさ／れてハか／これは平家物語のものではなく謡曲「小

督」の詞章の一部と思われる。

久曾神昇氏編の『私撰残簡集成』（汲古書院 H11）には「伝道恕僧正筆軍記物語歌集」というものがあり、同氏編『物語古筆断簡集成』（汲古書院 H14）には「伝西行筆平家物語注」があって、平家物語それ自体ではなく、抜書や人物注と思われるものの断簡もあるらしい。さらに後者には伝一条兼冬筆、伝万里小路惟房筆、伝近衛政家筆などの平家物語断簡が掲出されており、小林強氏によれば、これら以外にも、慶雲筆（もとは絵詞か）、兼成筆、持為筆、後深草院弁内侍筆、筆者不明（流布本系統か）などがあるという。それらについては、追々考察してゆきたい。

注

- 1 「軍記物語論究」（若草書房 H8）
- 2 「長門切統考」（國學院大學で中世文学を学ぶ 第2集）H21／3
- 3 「八坂系平家物語の断簡について」（平成七年度科研費研究成果報告書『平家物語八坂系の総合的研究』H8／3）
- 4 ①～⑤の番号は本稿の論述の便宜のために私に付したものである。
- 5 藤井隆・田中登『続国文学古筆入門』

（和泉書院 H1）

- 6 小林強「太平記の古筆切について」龍谷大学仏教文化研究所紀要45（H18／1）

- 7 藤井隆・田中登『続々国文学古筆入門』（和泉書院 H4）

- 8 『平家物語研究序説』（明治書院 S47）

- 9 近代でも、中院本は未刊国文資料に翻刻されたためひろく知られている。

- 10 八坂系諸本の詳細については『平家物語八坂系諸本の研究』（三弥井書店 H9）を参照されたい。なお「類本B種の本文は詳細な解題と校異を付して、一兩年中に刊行する計画が進んでいる。

- 11 例えば國學院大学図書館には、端本ながら流布本平家物語の卷子本、及び流布本近似本文の抜書の卷子本断簡が所蔵されている（平成十八年度國學院大学特色ある教育研究報告書『古典籍体験の会で学ぶ』〔H19／3〕に解題所載）。

余録

文字文化財研究所顧問

野崎典子

江戸後期の国学者高林方朗（たかばやし みちあきら）の書簡の中に気にかかる文字があつて、はっきりさせたい思いで書簡文に関わるものに目を通していたら、思いがけず、長年疑問に思っていた他の文字のことがひょっこり明白になった。まさに予定外の利益の“余録”である。

狂言台本を扱って久しいが、その台本の中に「ハア俺ハ備中の国古備津宮の神主に大藤内といふ者でムる」「最早祐経殿を切殺したでムらう」（古典文庫《大藤内》）のように、一般的には「ござる（御座る）」、「ござらう（御座らう）」と書かれて然るべきところ、「ムウ先夫にお待あれ」（古典文庫《筑紫奥》）「ムウぬるやのく」（古典文庫《煎物》）のような片仮名の「ム」と同形のものが出ている。

「（コト）」とか「（トモ）」のように字の一部をとり合わせて台字を作ったものと考えても「御座（坐）」のどの部分を抜

き出して作字したものやら理解に苦しむし、略体異体かと考えて「難字・異体字典」を引けば、「某」か「私」になるし、『高山寺本古往来表白集』の漢字索引を見れば「ム」は「参（参）」とあり、「ござる」には関わっていない。

我が国では古くから消息文の書けることが、教養・学問の必須であったから『雲州消息（明衡往来）』『貴嶺問答（消息詞）』『弘安礼節（雅筆往来）』『庭訓往来』『尺素往来』『玉章秘伝抄』など続々と書かれて、教科書として使用された実績があり、身分の上下関係により書札礼がやかましくいわれ、手本とする範例が掲げられた。

小松茂美『手紙の歴史』（岩波新書）には「奉（父）状」の例文に

「以此旨可下令披露給上。ム誠恐頓首謹言。」

月日 権大納言ム上

進上 藏人大夫殿

追言上。

是者至極敬礼也。更不依

子息官位。名字

下書「上字」。至極之礼也。

と掲げる。書止めや差出人の下の「ム」は、

「無（む）の省略で、空欄を意味する」

（傍点私に付す）

と注意を喚起して示している。

佐藤喜代治『日本文学史の研究』（明治書院）によると、時代は下って江戸になると、文語体を用いて記述したものを、理解し易いように俗語を交えて説明することが多くなり、平易なことをもって口述したところをそのまま筆録したものとして本居宣長の『古今集遠鏡』や平田篤胤の「古道大意」「俗神道大意」などを挙げて

「これらの筆録が公刊されたことは口語文の勢力の加はつてゐる事実を物語るとともに、一面これらがまた口語文の発展にあつたて大いに力あつたであらうと思はれる。今「古道大意」の一節をあげれば、

サテ此方ノトク道ノ趣ハ、何ニ拠テ申スゾト云ニ、古ヘノ事実ヲ御記シ伝ヘ遊バサレタル、朝廷ノ正シキ御書物ヲ本トシテ申スゾ、一体真ノ道ト云モノハ、事実ノ上ニ具ツテ有ルモノデム。然ルヲトカク世ノ記者ナドハ、尽ク教訓ト云フ事ヲ、記シタル書物デナクテハ、道ハ得ラレヌ如ク思テ居ルガ多イデ、コリヤ甚ノ

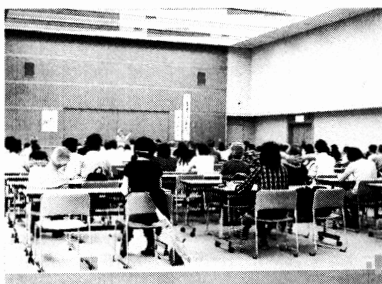
心得チガヒナコトデ、教ヘト申スモノハ、実事ヨリハ甚下イ物デム。其故ハ、実事が有レバ教ヘハイラズ。道ノ実事がナキ故ニ、ヨシヘト云コトガオコル。唐ノ老子ト云書ニモ、大道スタレテ仁義アリト申シタハコトヲ見ヌイタ語デム。殊ニ教ト云モノハ、人ノ心ニ親クハシミヌモノデ、其ハ譬ヘバ、武士ノ心ヲ励マスニ、軍ニ出テハ先駆セヨ、人ニ後レルナト書イタル、教ヘノ書物ヲ見セルヨリハ、古ヘノ勇士等ノ、人ニ先ダチ、勇猛サカンニ戦ヒ、高名ナド致シタル事実ノ軍書ヲ見タル方が、深ク心ニシミコンデ、我レモ事有ラバ、昔ノ誰々が如ク、適ヤツテ見セヤウト云フ、猛キ心ガフリ起ル。カノ先ガケセヨ後レルナト云フ教デハ、サマデ心ノ振起ラヌモノデム。

これは「平田篤胤先生講談 門人等筆記」とあるやうに、口述したことをかなり忠実に筆記したものと思はれる。「ム」は「ござる」といふ語を表はす記号で、歌舞伎芝居で客を案内する出方が、たばこ盆や「ござ」を持ち運ぶとき、□をたばこ盆の符号とし、△を「ござ」の符号と

して用ゐるものを利用したものであるといふ。」

(例文のルビは省き、傍点は私に付す) 　たばこ盆を□、蘭草(いぐさ)で編んだござむしろを△で用いたものによるとは全く驚いてしまった。なるほど三角△を筆で書けばムになってしまふであらう。

現在私達の前には、時代により、又書記作業をする人により、同じ形の文字が多様に使われた結果として残されている。補助手段として文字に準ずる記号もあったのである。



2008.10.5 愛知県図書館展示企画「和本の世界」関連講演会「古書は宝だ!」文字文化財研究所顧問 野崎典子先生

「短歌研究新人賞」次席入賞によせて

国文学科四年
原 梓

去る平成二十年八月、短歌研究社主宰の「第四十四回短歌研究新人賞」において、自作短歌三十首「図書館余聞」が、次席に入賞し、「短歌研究」九月号に掲載されました。僥倖ながら、その事についてこの場を借りてご報告をさせて頂く次第です。

ところで、「短歌研究新人賞」がどのような賞であるのかを、まず簡単に説明させて頂きたいと思います。短歌研究社発行の短歌誌「短歌研究」において、毎年公募する未発表連作三十首から選出される新人賞なのですが、その歴史は昭和二十九年の「短歌研究五十首詠」に始まり、第一回は中城ふみ子・寺山修司が受賞しています。その後も、阿木津英さんや加藤治郎さんなど、現在も歌壇で活躍されている歌人の方々が受賞され、本学のフランス学科を卒業された歌人・萩原裕幸さんも、昭和六十二年に同賞を受賞されています。

湿原を歩む温度で図書館をひとびと歩むやうつむきて

地下一階集密書庫 地下一階書庫
迷っているつもりはなけれども

(「図書館余聞」より)

これらの歌は、県大の付属図書館の情景を詠ったものです。「図書館余聞」は、授業の準備のために入り浸って、長い時間を過ごした図書館の様子を歌にした作品から始まり、作品を応募した時期にちょうど行っていた就職活動についてや、学校以外の日常生活を詠った歌も挟み、そしてまた

文学は坂と川の多きまちに隆盛する、と先生は言った。

坂も川も乏しき名古屋というまちで文学周辺おろる歩く

詩について語るころは水上を歩むころで(忍法にあらず)

「私恨」でも「紫紺」でもなく。「しこん」という響きが「詩魂」にやさすやと変換されて授業が続きぬ

というように、文学の周辺に意識が戻っ

ていく……という構成の連作になっています。授業の中で先生が仰った何気ない一言を、そのまま歌の中に詠み込んでいるものもあるのですが、国文学科での厳しくも楽しい日々の様子が少しでも伝われば、と思い、応募作として纏めました。

この作品が、このような良い評価を頂ける立派な作品になったのは、本当に、学科での充実した授業と、苦業を共にした友人たち、熱心に指導して下さいる先生方、そして歌において優れたモチーフ(題材)となってくれた、いつもお世話になっている付属図書館(学術情報センター)という存在のおかげなのです。この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げたいと思います。

実際、私は作歌活動において専作に悩む人間で、いつも歌のモチーフを見つけることに苦心するのですが、図書館を題材にして詠んだ歌たちは、不思議と、自身でも納得のゆく歌がスムーズに生まれました。次席を頂いた際、選考委員の方々に「本当に図書館よねえという感じが出ている」と評して頂いた事が嬉しかったのですが、図書館に導かれるようにつくった歌たちが、このように認められる事で、少しは付属図書

館に恩返しが出来ただろうか、と（非常に自分勝手ながら）思っています。

また、今回、付属図書館のご好意で、入賞作を紹介するミニコーナーを設けて頂き、広報「図書館だより」には、学術情報センター長が、あたたかいコメントを寄せてくださいました。このコーナーを目にした知人から声を掛けられる事も増え、嬉しく感じています。

今回の入賞を、単なる記念碑的な出来事として終らせるのではなく、ここをスタートにこれからももっとと良い歌をつくっていきけるよう努力してゆきたい、と今は思っています。そして、私にとってかけがえのない存在である県立大学が、これからもずっと、あたたかくかつ厳しく、学生が充実した日々を過ごせる、そんな場所でありますようにと願っております。

研究所の活動実績と計画

愛知県立大学文字文化財研究所は平成十九年度から発足しました。研究所構成員は、国文学科と日本文化学科の教員全員に加えて、本学名誉教授で「あいち国文の会」を

主宰する野崎典子氏が客員共同研究員の身分で顧問として加わっております。来年度から県立大学が改編されていますが、新設の日本文化学部の実業として活動を継続発展させて行きます。大学にとって社会と地域への貢献が重要な役割とされる今の時代に、アカデミズムを標榜する人文系学部が、このような形でお役に立ちたいと考えます。

研究所の活動内容は、創刊号に述べましたとおり、愛知県を中心に東海圏あるいは中部圏に所蔵されている文字文化財と、それにかかわる文物、芸術・芸能に関して、広く調査研究し情報を整理蓄積すること、その内容を県民と全国、全世界に発信することです。東京の歴史民俗博物館や国文学資料館、関西の民族博物館と並ぶ公的な研究・情報センターになることをめざしています。同時に、この活動は今必要とされている国民の言語力向上を下支えする意義があると考えております。文献や資料を整理し理解し解釈しそれを言葉で表現する訓練が思考能力を向上させるわけです。

幸い活動は順調です。今年度は平曲の普及と研究に関する活動が、荻野検校顕彰会と連携して大きな成果をあげました。盲人による平家琵琶の正統を伝える今井検校は

全国唯一一人の存在ですが、県の無形文化財指定をめざす動きを当研究所が支援すると朝日新聞に報道されました。秋の県大ファッショナブルでは平曲演奏会を本学図書館で開催しました。今井検校の伝える八句の映像の検索付きDVDがまもなく刊行されますが、その編集にも寄与しました。

また、愛知県図書館との連携企画では、九月一〇月に愛知県立大学附属図書館の蔵書の善本を中心とする展示「和本の世界」を行い、県民に奉仕することができました。展示する本の選定と説明書きの執筆を行い、期間中に野崎顧問が「古書は宝だ」と題して公開講演会を行いました。続く十一月から愛知図書館の蔵書のうち名古屋の現代詩をテーマに展示と公開講演会を行いました。詳しくは年報末尾の宮崎報告をご覧ください。

そのほか、久松潜一氏の著述目録改訂を知多郡東浦町中央図書館と連携して、江戸時代の文法学者鈴木朧に関する論集『文莫』の刊行を鈴木家と連携して、インターネット上で公開するなどの成果をあげました。研究所のホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

来年度は、これまで実績をあげた活動を

さらに充実させるとともに、県内外の寺社や旧家が所蔵している文書類に関する調査研究、情報の発信を数件予定しています。連携協力関係と御提供いただいた資料は、大学における教育に生かして行きます。



2008.11.5 県大ファンファーレ「平曲演奏会」
国風音楽会会長 今井検校勉

二〇〇八年度 文字文化財研究所活動報告

近世尾張藩の古代学（丸山裕美子）

近世尾張藩における古代史研究の実態を明らかにすることを旨とし、地道な資料調査を続けています。昨年度は各地に写本が所蔵される稲葉通邦（尾張藩士174）

（1801）の著作「逸令考」を調査し、「尾張名古屋の律令学―稲葉通邦『逸令考』を中心に―」（『愛知県立大学文学部論集』56）を発表しました。またその成果をもとに、外部資金として、財団法人武田科学振興財団から二〇〇八年度杏雨書屋研究奨励をいただくことになり（研究題目「江戸時代の律令学―医疾令復原研究を中心に―」）、杏雨書屋をはじめとして、国立公文書館（内閣文庫）、天理図書館、神宮文庫などに残る史料を閲覧調査しています。

名古屋モダニズム研究（宮崎真素美）

愛知県図書館の収集した愛知県ゆかりのモダニズム詩集約八〇冊について、当該図書館の協力を得て調査を行いました。本調査は、当該図書館の企画展示「1920's 30年代の愛知の詩人たち―モダニズム詩を中心に―」（二〇〇八年十一月一日～二〇〇九年二月二十五日）と連動しており、当該図書館から、愛知県立大学附属図書館を経由して依頼された関連講演に、その成果を反映させました。講演会は、二〇〇九年二月一日に愛知県図書館AVホールにて開催されました。



2009.2.11 講演会「愛知のモダニズム詩」
国文学科教授 宮崎真素美

後書き

第二号をお届けします。御寄稿いただいた皆様に心より感謝申し上げます。創刊号は手作りでしたが、体裁を整えました。いずれは冊子になることをめざします。ますますのご支援をお願い申し上げます。

第二号 平成二十一年三月発行

愛知県立大学 文字文化財研究所

〒480-0198（住所記載不要）

TEL・0561-641118（直通）
<http://www.lit.aichi-pu.ac.jp/kb/mozibun/>